

熊田千佳慕のデザイン資料と『FEMINA』

堀 宜雄

はじめに

絵本作家・熊田千佳慕（1911-2009）は、東京美術学校金工科卒業間近の1934年春、長兄・精華の友人でもあった山名文夫に師事し、グラフィック・デザイナーの道を志した。そして同年対外宣伝雑誌『NIPPON』の準備に追われていた、名取洋之助主宰の日本工房に山名とともに勤める。かつて稿者は日本工房での仕事を、「熊田千佳慕の世界」（註1）、「名取洋之助と日本工房 1931-1945」（註2）、「熊田千佳慕展 花、虫、スローライフの輝き」（註3）で一部紹介しているが、その後発見された資料もあり、それらをつなぎ合わせると、熊田五郎（千佳慕の本名）が手がけていたデザインの輪郭が新たに浮かび上がってくる。この小稿では、日本工房から日本写真工芸移籍後の未公開資料紹介、さらに第二次大戦後「他に例のない異色の雑誌」（吉田健二）（註4）である『FEMINA』を一瞥し、特異な画風を生んだ絵本作家の前史を振り返ってみたい。

1. 日本工房時代（1934-1939）

日本工房時代の熊田は、はじめ山名文夫のアシスタントとして細々とした広告のレイアウトなどを手がけていたが、1936年2月に山名が資生堂に復帰して日本工房を去ると、徐々に『NIPPON』の誌面レイアウトを任されるようになる。著名なのは、『NIPPON』8号の「伊豆の週末」で、土門拳の「出世作」と呼ばれ、報道写真家の評価を決定づけたものである。さらに、1937年秋より、国際文化振興会依頼の折り本『日本』を自宅で制作している。これが熊田の代表作といえる仕事である（註5）。日本工房での仕事を大別すると次のとおり。

日本工房時代の作品 *は福島県立美術館寄託



図1 『NIPPON』9号
裏表紙 1936年11月2日
374×265mm *



図2 『NIPPON』11号
1937年5月17日
369×265mm *



図3 『NIPPON』日本語版
表紙 1936年12月20日
372×263mm *



図4 『NIPPON』8号
「伊豆の週末」*

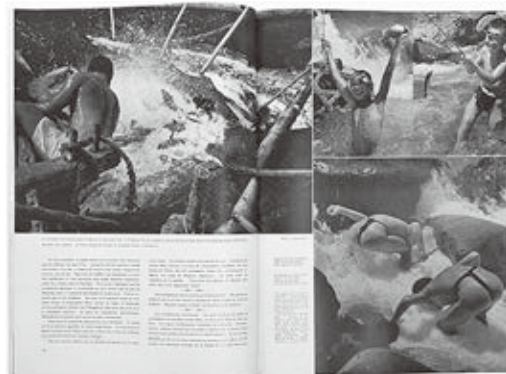


図5 『NIPPON』8号
「伊豆の週末」1936年8月8日
（文：飯島実、写真：土門拳）*

A. 『NIPPON』関連の仕事(1934-37)

創刊号広告図案より始まり、本格的な誌面レイアウトは7号から13号まで。『NIPPON』の誌面においては、写真をトリミングすることはあっても、フォトモンタージュはほぼ行っていない。余白を生かしたレイアウトと手書きレタリングなどを駆使しながら、本文のセンチュリー・オールド・スタイルという明治時代から使われている字体の活字による「古くささ」を払拭することにつとめていた(熊田)、とのこと。(図1~5)

B. 日本工房スポンサーの仕事

- ・国際文化振興会 折り本『日本』(1938年春)(図6~8)
- ・芝浦電気 電気扇ポスター(図10)、電気ドリルポスター(図12)、カレンダー
- ・鐘紡 包装紙、サービスステーション印刷物、夏衣ポスター(図11)

C. 副業的なデザインの仕事

- ・早稲田などの大学卒業アルバム制作(図9)
- ・日本陸上競技連盟Year Book
- ・三菱化成ポスター(1939年)(図13) など

なお、『NIPPON』については、拙稿『『NIPPON』考・序』(『日本美術史の杜』(村重寧先生星山晋也先生古稀記念論文集)竹林舎、2008年)を参照されたい。順風満帆にみえた日本工房での仕事は、1937年10月以降暗転する。藤本四八、亀倉雄策、高松甚二郎ら新たなスタッフが加わり、交詢社ビル2階の事務所が手狭となったこと。また第三代美術部長に河野鷹思が就任し、1939年に事務所が鈴木ビルに移転、国際報道工芸株式会社と社名が変わり、さらに土門拳の退社等、大きな変化があった。1938年3月頃の折り本『日本』完成後の自宅療養から復帰すると、あまり仕事がなかったようだ(註6)。

日本工房時代の作品



図6-8 折り本『日本』 1938年 国際文化振興会
275×305mm 国際交流基金蔵



図9 『早稲田大学政治経済学部卒業アルバム』 1936年
265×5365mm*



図10 《芝浦電気扇ポスター》 1936年(写真:名取洋之助/モデル:原節子) 756×526mm*

日本工房時代の作品



図11 《鐘紡ジョーゼットン夏衣ポスター》1936-37年
(写真：土門拳/モデル：市川春代) 510×708mm＊



図12 《芝浦電気ドリルポスター》1937-38年
(写真：土門拳) 633×529mm＊



図13 《三菱化成の農薬ポスター》1939年
(写真：松田正志/モデル：関千恵子) 601×423mm＊

2. 日本写真工芸社での仕事 (1943-45)

1939年末頃日本工房を退社した熊田は、しばらく自宅で静養する。熊田には2006-8年に刊行された自伝3部作(註7)があり(以下『自伝』と略す)、『熊田千佳慕 クマチカ先生の図鑑画集』(2011年、求龍堂)所載の年譜をあわせて経歴を抜き出すと、下記のようなになる。

1941年 7月頃応召、東部八十八部隊に配属、2ヶ月で召集解除。9月、帰宅。

1942年 4月、文寿堂(洋手帳会社)入社。

1943年 日本写真工芸社に入社。

『NIPPON PHILIPPIN』をはじめ、占領地の宣撫用ポスターや映画、雑誌類をてがける。

- ・《秘めたる覚悟(南方宣伝参考資料3)》1943年(図14)
- ・《「あの旗を撃て」組ポスター》1944年(図15)
- ・《ビルマ展出品目録写真説明文翻訳原稿》1944年頃(図16)
- ・《『NIPPON POCKET LIBRARY』2, 4, 5》1944-45年(図17)
- 2 NIPPON'S IMPERIAL ARMY
- 4 OLD TALES OF NIPPON FOR CHILDREN
- 5 PEERLESS FUJI

日本写真工芸社時代



図14 《秘めたる覚悟(南方宣伝参考資料3)》1943年＊



図15 《「あの旗を撃て」組ポスター》 1944年公開＊
ポスター各362×512mm… 6 枚、解説紙305×212mm… 1 枚

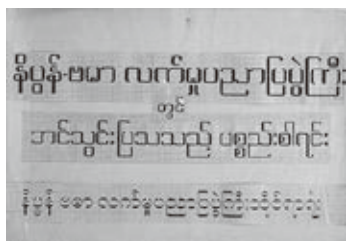


図16 《ビルマ展出品目録写真説明文翻訳原稿》
1944年頃 240×345mm＊



図17 『NIPPON POCKET LIBRARY』 2, 4, 5＊
2 NIPPON'S IMPERIAL ARMY 1945.1.20 149×105mm
4 OLD TALES OF NIPPON FOR CHILDREN 1944.7.25 149×104mm
5 PEERLESS FUJI 1945.1.20 149×107mm

3. 第二次世界大戦後

引き続き『自伝』から履歴を引く。

1945年 日本写真工芸社の事務員だったすぎ子と結婚。横浜大空襲で父を亡くす。終戦。

1946年 日本写真工芸社の社員だった松井直樹と出会い、米兵むけ雑誌『RIO』の制作に携わるが、資金繰りに失敗、未刊に終わる。

1947年 日本工場の同僚だった信田富夫（ライトパブリシティ創業者）に会い、鐘紡フォトスタジオに勤める。初めての絵本『狐のたくらみ』（手塚富雄著、中央公論社、1947年2月15日）の挿絵を描く。

1948年 高峰秀子をモデルにした鐘紡化粧品店のポスターを手がける。

《鐘紡化粧品店ポスター》（図18）

1949年 鐘紡を辞め、光吉夏弥のすすめで絵本画家となる。

ここには、河出書房『FEMINA』に関する記述は出てこない。しかし、熊田旧蔵資料には、『FEMINA』創刊号、3号の横長ポスターがあり（図20,21）、稿者の聞き取り調査の折にも、「戦後河出書房から婦人雑誌『FEMINA』を出した。話題になったが、短命で終わった。」との発言があり、熊田にとってデザイナー時代の最後を飾る仕事として、『FEMINA』という婦人雑誌は位置づけられる。

4. 『FEMINA』という雑誌

季刊雑誌『FEMINA』は、河出書房より1947年8月から翌年3月まで、3号が刊行されている。吉田健二の『占領期女性雑誌事典』によれば、

「当時、本誌については「超贅沢雑誌」で、「内容は、芸術趣味が濃く、いわば人々の生活を

第二次大戦後の作品



図18 《鐘紡化粧品ポスター》 1948年
(写真：松田正志/モデル：高峰秀子) 716×502mm*



図19 《経済復興会議ポスター（やみのない社会を）》 1947年*



図20,21 《『FEMINA』ポスター》 1947,48年*

眺めている雑誌」（土屋忠雄ほか「婦人雑誌に関する調査的研究」『野間教育研究所紀要』第2集、1950年3月）と評され、教養・趣味や服飾系雑誌の範疇で扱われていた。」

とあり、実際現物を手にとってみても、特異な判型（209×178mm、しいていえばA5変型）、文字組のみの頁が極めて少ない、凝った雑誌である。吉田の解説をさらに引いてみよう。

「1930年3月に河出孝雄が二代目の社長に就任」し、懸案だった女性雑誌は、「用紙統制などもあって実現していなかった」ため、「日本国憲法の制定に文化国家としての礎と発展を確信した河出孝雄が、その一助を担うべく“進歩的婦人文化雑誌”を標榜して創刊したもの」が『FEMINA』（フェミナ、ラテン語で「女性」の意）であるという。

印刷の仕様としては「特別規格の特殊A判（縦21cm×横17.5cm）（ママ）で、グラビア40頁、本文80頁の計120頁で発行。発行人竹泉武、編集人は荒川竹志。定価60円（ママ）。発行部数は1万8000部」。『FEMINA』は、季刊雑誌であることもそうだが、判型、三色カラー印刷、グラビア頁重視の編集、写真と記事の一体化など、従来の女性雑誌の型を破るもの」という。

なぜこうしたグラフ重視の雑誌が生まれたのか？その謎は、「日本工房」というキーワードにより氷解する。編集主体が青柳喜代（日本工房に1934年から在籍）（註8）、誌面レイアウトが熊田五郎〔在籍1934-39〕、写真担当の松田正志〔在籍1939-45〕（註9）は、全員日本工房の旧スタッフである。名取洋之助が戦後「日本の『LIFE』をめざす」と意気込んだ『週刊サンニュース』（註10）と比べると、『FEMINA』の方がはるかに『NIPPON』の後継としての、高い文化水準を保っている。あるいはこうも言える、グラフ表現の申し子というべき集団・日本工房で育ったスタッフたちは、過剰なまでのグラフ展開を、むしろ当たり前と考え、その理想追求に邁進したのだ。

雑誌の第一印象は、熊田によるアート・ディレクションが隅々まで行き渡っている雑誌だな、というものであった。標題ロゴの細長いゴチック体は、図11、12に用いられたものと共通

するテイストである。さらに標題紙の花柄、目次の装飾、見出しの模様、花束カットなど、注意してみれば「go」という熊田五郎のサインを認めることができる。雪、水玉、名もない草花など、身近で見過ごされがちな「かたち」を、デザインに生かす熊田ならではの姿勢といえるだろう。

『FEMINA』は、対外宣伝雑誌『NIPPON』の理想主義的な側面を濃厚に受け継いだ雑誌であった。ただし、『NIPPON』自体が国際文化振興会の強力なバックアップなしには存続できなかったように、最初から「売れる」ものとはなにくかった。終戦間もない、生活もままならない時期に、この理想主義はすなりとは受け容れられず、1948年3月の第3号刊行後、しばらく休刊となり、同年10月には、誌名を『若い婦人』と変え、月刊誌として刊行されていく。熊田も行きがかり上仕事は引き受けているが、紙質も印刷も同じ雑誌の後継版とは思えぬ、無残な内容となった。

その落差はここでは詳述しないが、結局月刊誌『若い婦人』は1949年に終刊したと思われる。(紙の配給統制が撤廃され、大手出版社の婦人雑誌が盛り返す時期にもあたり、「婦人雑誌不況」の時期でもあったらしい。)(註11)

5. 結びにかえて

1934年から、第二次大戦をはさんで、1949年までが熊田千佳慕のデザイナー時代といえる。実質、15年程度、日本工房で『NIPPON』の制作をはじめ、写真をもちいた大胆なグラフ表現と、手書きのレタリングや、身近な自然物から抽出されたかわいらしい、優美な模様が、熊田五郎の持ち味であった。

しかし、印刷媒体である雑誌は、「誰のために」というメッセージの受け手が明確でないこと、商業的に成功しなければ、媒体が存続できないということで行き詰まってしまった。

もう一度原点に戻って、小さな人たちのために、一本の鉛筆からスタートする絵本作家へと、熊田はゆっくりと苦難の道を選び、歩んでゆく。

(ほり よしお/専門員)

註

- (1) 「熊田千佳慕の世界 はな・むし・とり・ゆめ」 福島県立美術館 2001年
- (2) 「名取洋之助と日本工房 1931-1945」 福島県立美術館、川崎市市民ミュージアム、足利市立美術館、長崎県美術館、毎日新聞社 2006年。図録は毎日新聞社発行と、岩波書店書籍があり、いずれも白山眞理・堀宜雄著、岩波書店編集。
- (3) 「熊田千佳慕展 花、虫、スローライフの輝き」 目黒区美術館 2006年
- (4) 吉田健二編『占領期女性雑誌事典』第1巻 金沢文庫閣 2003年
- (5) 折り本『日本』は、折り畳み式の写真帖を名取の妻エルナが思いつき、見本を作成して、1937年9月に国際文化振興会が制作決定、日本工房が受託。はじめ藤本東五が取り組んだが遅々として進まず、熊田が自宅に材料を持ち帰って制作した。前掲註2 図録 ix頁、53頁。
- (6) 前掲註2 図録 p.53。
- (7) 熊田千佳慕『横浜ハイカラ少年記』2006年、同『横浜ハイカラ青年記』2007年、同『横浜ハイカラ貧乏記』2008年、いずれもフレーベル館。
- (8) 青柳喜代(1913?-不明) 1934年津田塾女子英学塾を出て、同年日本工房に入る。名取の妻、エルナ・メクレンブルクの秘書的仕事や経理などをしていた。『先駆の青春 名取洋之助とそのスタッフたちの記録』所載の同僚の回想によれば、1939年初冬には失恋失踪事件を起こしたこともある。第二次大戦後、河出書房の『FEMINA』『若い婦人』休刊後の消息は不明。左の写真は、1938年頃、日本工房での野球大会のもの。JPS蔵。
- (9) 松田正志(1916-不明) 岩手県遠野市生まれ。旧制中学卒業後、オリエンタル写真工業写真部に入社、写真技術を覚える。1939年、土門拳退社後の日本工房に入社、本社付のカメラマンとして『NIPPON』などの写真を撮影した。第二次大戦後はフリーとなったが、1947年頃は、日本工房の同僚であった信田富夫の誘いで、鐘紡フォトスタジオ(銀座3丁目)に勤めた。その後、博報堂に招かれ、広告写真家を育成した。晩年陶芸もてがけた。
- (10) 『復刻版 週刊サンニユース』国書刊行会、2017年により、その全容が明らかになったグラフ誌。別巻に白山眞理による解説がある。
- (11) 註4 前掲書

なお、日本工房および名取洋之助の動向については、下記の文献を参照した。

- ・『〈報道写真〉と戦争 1930-1960』白山眞理 吉川弘文館 2014年
- ・『報道写真の青春時代』石川保昌編 講談社 1991年
- ・『わがままいっぱい名取洋之助』三神真彦 筑摩書房 1988年
- ・『先駆の青春 名取洋之助とそのスタッフたちの記録』日本工房の会 私家版 1980年

季刊『FEMINA』第1巻第1号

1947年8月5日発行 定価68円 207×177mm 122頁
 河出書房（東京都千代田区神田小川町3-8） 編集者：荒川竹志
 発行者：竹泉武 印刷所：大日本印刷 表紙印刷：光村原色印刷
 所 配給先：日本出版配給／カット：山名文夫（ayao）、熊田五郎（go）、写真：松田正志（カネボウ・フォト・スタヂオ）
 印刷メモ：表紙は天然色撮影、グラフ頁はグラビア印刷で、用紙も本文紙と変えている。標題紙と目次は紅染め紙を使用、見返しは青空に白雲が浮かぶ背景に宮本百合子の巻頭言（裏見返しも同様の印刷）。裏表紙は鐘紡化粧品。人工着色による印刷と思われ、熊田描くバラの花が花輪のように化粧品の瓶を取り囲み、当時としては大変美しいカラー印刷であったと思われる。



表紙 松田正志撮影



裏表紙 熊田五郎画



FEMINA'S SALON
 渡辺渡写真

目次



標題紙

見返し 宮本百合子



「私の東京地図」
 佐多稲子

詩「写真」
 丸山薫／丸木位里・画



FEMINA'S SALON
 名取洋之助写真

FEMINA'S SALON
 木村伊兵衛写真



「恋愛と結婚の書」
 河盛好蔵

「私の東京地図」



フォト・ストーリー「私の東京地図」 佐多稲子／写真：木村伊兵衛



グラフ
 「戦後のフランス美術」

「戦後のフランス美術界」
 土方定一



グラフ「FEMINA'S MODE」モデル：山口淑子

季刊『FEMINA』第1巻第2号

1947年11月30日発行 定価80円 208×178mm 120頁
 河出書房（東京都千代田区神田小川町3-8） 編集者：荒川竹志
 発行者：竹泉武 印刷所：大日本印刷 表紙印刷：光村原色印刷
 所配給先：日本出版配給／カット：熊田五郎、写真：松田正志（カネボウ・フォト・スタジオ）

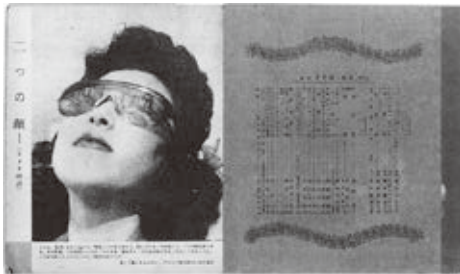
メモ：表紙・裏表紙の天然色印刷は、創刊号同様の美しい出来映え。
 標題紙と目次の紅染め用紙、グラフ頁の用紙変更も同様。見返し・裏見返し黒の多い写真の上に白抜き文字。心憎い演出である。
 グラフは、藤本四八の「二つの顔」（世相を批評的に表現）、堀口捨巳による桂離宮の16頁にわたる紹介、渡辺義雄の12頁による淡路島ルポなど、充実している。



表紙



裏表紙



グラフ「二つの顔」
藤本四八撮影

目次



標題紙

見返し
斎藤茂吉「ぶどう」（短歌）



グラフ「FEMINA'S MODE」
モデル：原節子/写真：松田正志



「母の秋」（創作）
神西清

グラフ「二つの顔」
写真：藤本四八



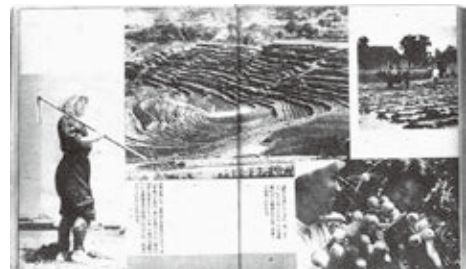
グラフ「桂離宮」堀口捨巳解説



グラフ「桂離宮」堀口捨巳解説



フォト・ストーリー「淡路島」（編集部）／
写真：渡辺義雄



フォト・ストーリー「淡路島」（編集部）／
写真：渡辺義雄

季刊『FEMINA』第3号

1948年3月1日発行 定価80円 210×179mm 102頁
 河出書房（東京都千代田区神田小川町3-8） 編集者：荒川竹志
 発行人：竹泉武 印刷所：大日本印刷 表紙印刷：光村原色印刷
 所配給先：日本出版配給
 カット：熊田五郎、写真：青柳榮次郎（カネボウ・フォト・スタジオ）
 メモ：印刷仕様では、グラフ頁が削られて創刊号の半分になった。
 表紙・裏表紙の天然色印刷は変わらず、標題紙と目次の紅染め紙使用、見返し・裏見返し写真の上に文字のせも同様。記事に時事、社会的テーマのものが入り、新たに「フェミナ世界通信」が設けられた。グラフは、四人の芸術家女性特集、モード、聖母像の変遷という美術もの、そして昆虫特集。結果的に最終号となった。



表紙



裏表紙



瞬間—若き芸術家たち— 写真：松田正志



瞬間—若き芸術家たち— 目次



「FEMINA'S MODE」 写真：青柳榮次郎



「FEMINA'S MODE」 写真：青柳榮次郎



グラフ「小さい世界」 写真：田村榮



グラフ「聖母像の変遷」 「聖母像の変遷」
大久保泰

月刊『若い婦人』第1号

1948年10月1日発行 定価45円 208×150mm 64頁
 河出書房（東京都千代田区神田小川町3-8） 編集人：
 荒川竹志 発行人：竹泉武 印刷所：文壽堂工場 配給
 先：日本出版配給 カット：熊田五郎、下村俊／表紙写真：
 松田正志（カネボウ・フォト・スタジオ）
 メモ：一見して定価も下がったが、印刷の質も低下した
 ことがわかる。巻末「編集室にて」を青柳喜代が執筆、「建
 設的で明るい編集方針を以て、若き女性のたくましい成
 長のために共に努力してゆきたい」とある。グラフはな
 く、特集色刷り頁が10頁あり、折込や半裁が用いられて
 いる。 左：表紙、右：巻頭の折込の色刷頁



『FEMINA』 目次 グラフ頁は頁数なし []内は稿者補

第1巻第1号 1947.8.5

表紙：[女性の顔] 撮影：松田正志／構成：熊田五郎	
見返し：宮本百合子「未来を築く力」／撮影：松田正志	
グラフ□「FEMINA SALON」	(10頁)
渡辺渡・岡本東洋「鯉」・長濱慶三「湖畔の譜」・永田一	
脩「大正池」・小石清「残照」・木村伊兵衛「女の顔」・名	
取洋之助「蓮池」・小合生活「高山に咲く」・塚本閻治「夏	
山」・土門拳「杏花村」	
「お手々つないで」平林たい子(藤川榮子挿画)	1
「疑ひ得る精神」向坂逸郎	12
詩「写真」丸山薫(丸木位里挿画)	16
フォト・ストーリー□「私の東京地図」佐多稲子／写真：	
木村伊兵衛	(16頁)
あなたの読書室○「恋愛と結婚の處」河盛好藏／カット：	
山名文夫	17
「教養についてーキリスト教のあたへるものー」小林珍	
雄	22
グラフ「守られた自由ーキリシタンの遺物をみるー」写	
真：渡邊義雄	(4頁)
「毛虫」芹澤光治良／カット：末松正樹	28
「愛情の歴史ー萬葉を中心としてー」土岐善麿／カット：	
熊田五郎	37
「FEMINA'S ESSAYS」「ゆかた」藤原あき・「美」赤松俊子・	
「花さきみてる春」三井禮子	45
「FEMINA'S MODE」「服飾の『カン』」西村次郎	48
グラフ「FEMINA'S MODE」制作：銀座カネボウ／写	
真：松田正志	(4頁)
今日への窓○「インフレをめぐって」岡崎三郎・「二つ	
の流れ」高橋正雄	50
「處女性の科學ーDeflorationの話ー」古澤嘉夫	53
花筐○	62
はじめにフェミナありき○	63
「戦後のフランス美術界」土方定一	64
グラフ「戦後のフランス美術」	(6頁)
「幸福な部屋」阿部知二／カット：向井潤吉	68
「新しい時代へー創刊の辞にかえてー」K・A [青柳喜代]	
奥付	80
裏見返し：「わかきいのちなれば」(詩) 神保光太郎／	
撮影：岡本東洋	
裏表紙：カネボウ化粧品 [構成・描画：熊田五郎]	

第1巻第2号 1947.11.30

表紙：撮影：松田正志／構成：熊田五郎	
見返し：「ぶだう」斎藤茂吉(短歌)／撮影：青柳榮次郎	
グラフ□藤本四八「二つの顔ー(カメラ時評)」	(8頁)
／2頁目のみ木村伊兵衛	
「母の秋」神西清	1
グラフ□「FEMINA'S MODE」制作：銀座カネボウ／	
モデル：原節子・木暮実千代／写真：松田正志	(6頁)
「FEMINA'S MODE」(編集部)	17
「今日のヒューマニズム」佐藤信衛	19

「ストリンドベルクの戀」植村敏夫	24
「明治維新をどう見るべきか」土屋喬雄	30
グラフ□「山の朝」篠俊雄／「祈り」安田勝彦	(2頁)
「星のある客間ー盲洋琴家への手紙ー」藤原あき	36
「思ひ出す人」高橋誠一郎	40
「桂離宮」堀口捨巳	44
グラフ「桂離宮」解説：堀口捨巳	(10頁)
あなたの読書室○「社會科學への道」岡崎三郎	50
「FEMINA'S ESSAYS」○「或る英國婦人との會話」三島す	
み江・「この雜文」藤川榮子・「身辺雜記」帯刀貞代	54
今日への窓○「来るべき生活」原祐三・「ユネスコの生	
誕」箕輪三郎	60
話のブーケ○(編集部)	64
フォト・ストーリー□「淡路島」(編集部)／写真：渡邊	
義雄	(12頁)
「踊るアメリカ」光吉夏彌	66
「夜曲」中里恒子／カット：末松正樹	70
「編集室からー皆さまへの御返事にかえてー」T・A [荒	
川竹志]／奥付	80
裏見返し：「社會の子」(詩)クボカワ・ツルジロー／攝	
影：松田正志	
裏表紙 スタート化粧品「ポリープ」 [撮影：松田正	
志／構成・描画：熊田五郎]	

第3巻 1948.3.1

表紙：撮影：青柳榮次郎／構成：熊田五郎	
見返し：村野四郎「滑降」(詩)／撮影：永田一脩	
グラフ□松田正志「瞬間ー若き芸術家たちー」	(4頁)
[貝谷八百子(尾崎宏次解説)、諏訪根自子(野呂信次郎	
解説)、安川加壽子(野村光一解説)、桂ユキ子(植村鷹	
千代解説)]	
「青い鳥」伊藤整／挿画：岡田謙三	1
花筐 編集部(W)	15
「嫁から妻へ」中川善之助	16
「バリヂェンヌと流行」小松ふみ子	25
グラフ「FEMINA'S MODE」写真：青柳榮次郎	(4頁)
「夢と愛についてー僕の恋愛論ー」福田恆存	26
「リンカーンの女性たち」火野千與	35
「疎開日記」井伏鱒二	38
あなたの読書室○「アメリカ文学への招待」西川正身	42
「Ave Mariaー聖母の変遷ー」大久保泰	48
グラフ「聖母像」	(6頁)
今日への窓○	
「世界の食糧・日本の食糧」土屋清	54
「鉄のカーテン」の内と外 福井文雄	59
フェミナ世界通信○	63
グラフ□「小さい世界」写真：田村榮	(6頁)
「背信者ーイタリア物語ー」白井隆彦／挿画：末松正	
樹	66
「編集室から」青柳喜代／奥付	80
裏見返し：「京のうた」川田順／撮影：岡本東洋	
裏表紙：富士の天然色フィルム「FUJI COLOR FILM」	
[T.D.A.須田圭子／撮影：佐野公彦]	

要旨

熊田千佳慕のデザイン資料と『FEMINA』

堀 宜雄（福島県立美術館専門員）

絵本作家・熊田千佳慕（1911-2009）は、東京美術学校卒業後山名文夫に師事し、1934年対外宣伝雑誌『NIPPON』を準備していた、名取洋之助主宰の日本工房に山名とともに勤め、グラフィック・デザイナーとして出発した。かつて稿者は日本工房での仕事を、「熊田千佳慕の世界」（2001年）「名取洋之助と日本工房 1931-1945」（2006年）、「熊田千佳慕展 花、虫、スローライフの輝き」展（2006年）で一部紹介しているが、その後発見された資料もあり、それらをつなぎ合わせると、デザイナー熊田五郎（千佳慕の本名）が手がけていた仕事の輪郭が新たに浮かび上がってくる。この小稿では、福島県立美術館に寄託されている、日本工房から第二次大戦後にいたる主要デザイン資料紹介を行い、さらに第二次大戦後「他に例のない異色の」幻の雑誌である『FEMINA』を一瞥し、特異な画風形成にいたる絵本作家の前史を振り返ってみたい。

『FEMINA』という雑誌は、日本工房で写真を多用したグラフ表現を熟知する熊田五郎が主となって誌面レイアウトを行い、スタッフ写真家の松田正志以外にも、木村伊兵衛、土門拳、藤本四八らの報道写真をグラフ頁に設けた、一般的な総合雑誌の枠からは大きく逸脱したものであった。原稿も、日本工房の女性編集者としてならした青柳喜代が編集の中心となり、対外宣伝雑誌『NIPPON』の後継的雑誌であったが、終戦後の混沌時代には羽ばたくことができずに終わり、熊田は絵本作家へと転身した。

Kumada Chikabo's Design Work and *FEMINA*

Hori Yoshio, Curator, Fukushima Prefectural Museum of Art

After graduating from Tokyo School of Fine Arts, the renowned book illustrator Kumada Chikabo(1911-2009) began his career as a graphic designer under the tutelage of Yamana Ayao. In 1934, he joined Nippon Kōbō (Nippon Studio), a design firm led by Natori Yōnosuke, where he worked alongside Yamana to help produce *NIPPON*, an advertising magazine with an international focus.

I have previously highlighted aspects of Kumada's work during his time at Nippon Kōbō in *The World of Kumada Chikabo* (2001) and *Natori Yōnosuke and Nippon Kōbō 1931-1945* (2006), published by the museum, as well as in the exhibition *Kumada Chikabo: The Radiance of Flowers, Insects, and Slow Life* (2006). Since then, additional materials have come to light that together reveal a clearer picture of the artist's early years as a designer, still working under his birth name of Kumada Gorō.

This article showcases key design materials archived at the Fukushima Prefectural Museum of Art dating from Kumada's time at Nippon Kōbō through the postwar era. It also offers a brief examination of *FEMINA*, a groundbreaking postwar magazine that provides insight into this formative period which shaped Kumada's distinctive artistic style.

FEMINA deviated significantly from other general-interest magazines of its day. Kumada, principally responsible for its graphic design and layout, employed techniques honed at Nippon Kōbō which made liberal use of photographic images, incorporating work by in-house photographer

Matsuda Masashi as well as the likes of photojournalists Kimura Ihee, Domon Ken, and Fujimoto Shihachi.

In terms of *FEMINA*'s editorial direction, the magazine was led by Aoyagi Kiyo, a prominent female editor at Nippon Kōbō, and featured contributions from distinguished writers such as Miyamoto Yuriko. Despite its ambitious vision and lavish production, however, *FEMINA* struggled to find a foothold in the chaotic postwar period and proved short-lived. Following its demise, Kumada transitioned into the book illustrator that he is remembered as today.